
黄金の右手を持つ男

ほしの すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の右手を持つ男

【Nコード】

N5317E

【作者名】

ほしの すばる

【あらすじ】

私立花園学園の生徒会副会長である徳平慎は、『学園内での恋愛禁止』を提案する。生徒会会長の爽風嵐丸はこれに反対し、慎に恋愛の気持ち良さを教えようとするが……。

第1話

私立花園学園^{はなぞの}。県下でも美形ぞろいで有名な完全寮制の男子高校である。

どんなバカでも、容姿さえよければ……というか、理事長に気に入られれば簡単に入学できてしまうというウワサがたってしまうほどだった。

*

*

*

*

*

「提案します」

生徒会役員会終了間際の声に、室内にいた生徒たちの視線が声の主に集中した。

徳平慎^{とくだいらしん}。一年生でありながら、その類いまれなる美しい容姿によって生徒会副会長という地位にあった。

少し丸みのある輪郭の中には、碧い瞳と筋の通った鼻と引き締まった形の良い唇がバランスよく収まっている。やわらかな栗色の髪とその碧い瞳は祖父からの遺伝らしい。

男子の中ではどちらかというと小柄な彼は守ってあげなくなるタイプのように見られがちだが、その外見とは裏腹に彼はありとあらゆる武道に秀でていた。なめてかかると、こちらが痛い目に合ってしまう。

「何かな、副会長」

^{さわかぜらんまる}

生徒会長である爽風嵐丸は、その切れ長の双眸を細めて慎を見つめた。漆黒の瞳と髪的美貌の持ち主は一年の時から三期連続で生徒会長の地位を独占していた。

慎を天使に例えるのなら、嵐丸はまさに神のような存在といえよう。

垂下がった前髪をかきあげるさりげない仕草ひとつしただけで、失神する者もいるぐらいだった。

「会長、ボクは学園内での恋愛禁止を提案します!」

立ち上がった慎は、キツパリと凜とした声で言った。と同時に、他の生徒たちが騒めき始め、室内には重苦しい空気が漂う。

「それはどうしてかな?」

椅子にもたれかかり、あくまで嵐丸は冷静に問う。

「どういうこと、って……?」

慎の頬がぴくぴくしているのがわかった。

「会長がとぼけるつもりなら、ボクも先にひとつだけ言わせてもらいますけど。ここは生徒会室なんですよ! ファントジー映画とかに出てくる王様の謁見の間とかじゃないんです! どうして、会長が玉座に座っててボクたちは机も椅子も与えられず、あなたにひれふしていなければならないんですか?」

ぜえぜえと肩をいからせてまくしたてる慎。

「ずいぶんと説明くさいセリフだな。ま、それはともかくとして。だって、この方が楽しいだろう。三年目にもなるとやっぱり変わったことやりたいからな」

「だからって、もつと他に何かあるでしょう? そんなことにばかり生徒会のお金使って」

「いいんじゃない。みんな満足してるみたいなんだから。それに、ファントジーは今年のマイブームだし」

しれっと悪びれず答える嵐丸。慎は両拳をきつく握りしめて、必死に怒りを押さえているといった様子だった。

「会長がそんなだから他の生徒たちが調子に乗るんですつ!」

「うちの学園は基本的に自由奔放なんだから」

「それにも限度があります!」

慎が嵐丸の言葉をさえぎる。かなり興奮してきているようである。

「手をつなぐ程度ならボクだって我慢できます。しかし、所構わずキスはする。寮ではよばいが頻繁に行なわれている。この状況に会長は何も感じないんですか?」

「別に。恋愛は当人同士の自由だ。それを他人が……いや、校則などで縛るものではない」

もつともらしい正論を返すと、慎はうつむいて体を震わせた。

「何が当人同士の自由ですか?」

慎は顔を上げると、嵐丸に歩み寄る。

「男と男で恋愛して何がいいんですか?」

怒りに顔を紅潮させ、ガミガミとまくしたててくる慎。他の生徒たちはただ呆然とその光景を見つめていた。

嵐丸にここまでキツパリと反論を述べたのは、慎が初めてだった。しかし、嵐丸にはそれがかえって楽しくて楽しくてたまらなかった。(この顔見せられると、余計にいじめたくなるんだよな)

嵐丸の悪い癖がまた出始めていた。

「しょうがないだろう。ここは男子校なんだから」

「そんな当たり前みたいに言わないで下さい! と、とにかく、ボクの提案受け入れてもらいます」

「まあ、次の役員会までには検討しておくよ」

に「つこりと微笑むと、さすがの慎もそれ以上は何も言っではこなかった。

「それでは、本日の役員会は終わり」

嵐丸の声に一同が立ち上がり恭しく一礼する。

生徒会室から真っ先に出ていったのは、やはり慎だった。

「会長、どうするおつもりですか?」

慎がいなくなったのを見計らって、書記である篠崎雅祐しのざき まゆひろが少し距離をおいて、不安げな表情を浮かべて嵐丸を見つめている。彼は去年までは副会長だったが、慎の登場によって今は書記の地位に甘んじている。

「副会長の提案が決まってしまうたら、僕はもう……」

と、涙ぐむ。他の生徒たちも同じ心境なのだろう。口には出さないが、みんな悲しげな瞳で嵐丸を見つめている。

「安心しろ。俺だってそんなことになっちまったら人生終わりだからな」

「本当ですか？」

パツと一同の顔が明るさを取り戻す。うれしさのあまり抱き合ってキスをしている者もいた。

「要するにだ。あいつにわからせちまえばいいんだ。アレの気持ち良さを」

嵐丸が魔性の笑みを浮かべた。

「お前たちどんなテを使ってもいいから、慎を落とせ。俺が許可する」

「許可するって言われましても、副会長はガードが硬いんですよ。今まで何人かよばいに挑戦した者もいるんですが、全員返り討ちに合ってますし」

「だから、どんなテを使っても、だ！ あいつにだって弱点のひとつやふたつはあるだろうからな」

「とにかく、がんばってみます」

雅祐たちはその瞳に闘志を燃やし、そろそろと退室していく。

（ま、期待はしてないけどな。俺の見込んだ男がそんなにあっさりと落とされるとつまないしな）

嵐丸は胸中で毒つきながら、ほくそ笑んだ。

慎は意味のない生徒会役員会を終えると、すぐに寮へ帰った。

男子寮は学園から徒歩三分の位置にあった。二十階建ての高級マンションを思わせるエントランスを抜けると、慎はエレベーターに乗る。

慎は自分の部屋がある五階のボタンを押す。

「どうしてボクは会長の前だと素直になれないんだろう」

エレベーターの中で、慎はひとりごちた。

花園学園を受験したあの日。慎は初めて嵐丸に出会った。あんなに綺麗な男の人は見たことがなかった。

心がときめいていた。自分でも信じられないくらいに。そして、まるで吸い寄せられるように慎の唇に嵐丸の唇が触れてきた。

初めてのキス。

慎の心は唇と同時に嵐丸に奪われたのだった。

（なのに、会長ときたらボクの気持ちを知ってか知らぬか、手当たり次第つまみ食いばかりして……）

今日の生徒会役員会での提案は、嵐丸に対するやきもちだった。

（でも、あんなのであの人を縛れるわけないんだよなあ）

慎は胸中でばやくと、長いため息をもらした。

エレベーターが五階に到着すると、ドアがゆっくりと開く。

ロウカに敷かれた赤い絨毯の上を歩きながら、慎は自分の部屋に向かう。

慎の部屋のドアの前に誰かが立っていた。

「あ、徳平くん」

気付いて、慎の方を見る。隣室の加我山岬^{かがやまみさき}だった。慎と同じく一年生だ。クラスは違うが、おとなしい性格の岬は慎が気を許せる数少ない人間だった。

説明するまでもなく、容姿はかわいいに属するタイプだ。

「実家からクッキー送ってきたから、いっしょに食べないかなって思ってた」

人懐っこい笑顔を浮かべてくる。

「わざわざ待っててくれたんだ。ありがとう」

笑顔で答えると、慎は部屋のカギを開けた。

ワンルूमマンションを思わせる室内には、電化製品や家具といった生活に必要なものはすべてそろえられていた。

「お邪魔しまーす」

岬は部屋に入ってくると、テーブルの上にクッキーの入った缶を置いた。

「飲み物が缶しかないんだけど、いいかな？」

「うん。ありがとう」

慎は冷蔵庫を開けると、ミルクティーとコーヒーを取る。ミルクティーの方を岬の前に置くと、慎も腰を降ろした。

「いただきまーす」

岬はミルクティーを取る。

慎はコーヒーを一口飲むと、岬が開けてくれたクッキーを手に取った。

「あ、あの徳平くん。さっき聞いたんだけど、今日の役員会で何かすごい提案をしたんだって？」

ミルクティーの缶に口をつけながら、もぞもぞとしゃべる岬。

「早いね。もう知ってるんだ」

「それで……あの、徳平くんはその……本気でそう思ってるの？」

「うん……まあね」

慎は曖昧に答える。今更後悔しているなどとは言えなかった。

「僕は今のままでいいと思うんだけど」

岬が小声で呟く。

（そういえば、加我山くんはどうやって今日の役員会でのボクの提案を知ってるんだろう？ ボクは役員会が終わってすぐに寮に帰ってきたっていうのに）

「っ？」

慎は口の中に入れたクッキーに違和感を感じてすぐに吐き出した。

「何を入れた？」

慎は岬をにらみつけた。岬は引きつった顔でこちらを凝視していた。

「ぼ、僕は嫌だって言ったんだよ。だけど、篠崎センパイが言うことになったら、僕の願いを叶えてくれるって言うてくれたから」

「願い？」

岬はポツと頬を赤らめる。何の願いだったのかはだいたいの想像はつくので突っ込まないでおく。

慎は両手をわななかせて、すくつと立ち上がる。

「ごめんなさい、徳平くんっ！」

涙目になって、慎の足にすがりついてくる岬。

「でも、徳平くんもいつかはわかるよ。あの気持ち良さが……」
熱い吐息をもらす岬。

岬の気持ちもわからないでもないが、もう後戻りはできない状況に追い込まれていることを慎は再確信した。

慎は岬の首根っこをつかむと、そのまま部屋の扉を開けてロウ力を放り出す。

「あーん、徳平くん！ 僕の話聞いてよーっ！」

扉の向こうで岬が訴えかけてくる。

「んなの聞けるかーっ！」

慎は罪悪感を感じながらも、岬が持ってきたクッキーも放り出す。岬はしばらくの間何かわめいていたが、慎は徹底的に無視した。

（ごめん、岬くん）

慎は心の中で岬に謝った。

「それにしても、反対派がこんなに早く仕掛けてくるなんて」

考えていなかったわけではない。あんな提案をすれば全校生徒、いや教師たちさえも敵に回すことになってしまつのは必然だった。

慎は身の危機を感じ、夕食さえも他の生徒たちとは別に取ることにした。

「あの人がおとなしくしているはずがなかったか」

慎は毒づいた。

自分を亡き者にしてまで、今の性欲を守り続けたいのだろうか。

（会長はそこまで……）

落ち込んだ後に、やり場のない怒りがふつふつとこみあげてくる。

「こうなったらボクにだって意地があるっ！ 絶対にボクの提案を成立させてみせるからな」 慎は日課の筋力トレーニングを終えたと、これからの戦いに備えてさっさと寝ることにした。

第2話

生徒会室に設けられているテラスで、嵐丸はさわやかな秋の空気を吸いながら優雅な午後のティータイムを過ごしていた。

ここから見える木々の大半は紅葉に染まっている。

ロイヤルコペンハーゲンのカップの中には、ローズマリーティー。同じくロイヤルコペンハーゲンの皿の上には、五つ星レストランに行かなければ食べることのできないモンブランが乗っていた。

授業を終え、三時にここで一人でティータイムを取るのは嵐丸の日課だった。

嵐丸はローズマリーの薫りを嗅いで、カップに口をつけた。四方から熱い視線を感じる。どこからか嵐丸のファンが常に見つめているのだ。だからこそ、この一人のティータイムは楽しいのだ。

（俺って何て罪深い男なんだ。自分の美しさが怖い）

胸中で呟き、自嘲する。

そこへ。

「会長っ！」

けっして誰も邪魔することのできない嵐丸のティータイムに、その怒りに満ちた声は割って入ってきた。

「お話があります！」

美しいその顔には明らかに怒りが表われていた。心なしか目の下には隈ができてるように見えた。

「どうぞ、副会長」

嵐丸はふつと吐息をもらすと、慎をテラスへ招く。

「いえ、ここでけっこうです」

慎は仁王立ちしたまま、こちらへは来ようとはしなかった。

何を言いに来たのかは検討がついているが、嵐丸はあえて気付かぬフリをする。

「話っているのは何かな？」

「とばけないで下さいっ！」

慎は両手をわななかせる。その怒った表情がまた嵐丸を刺激してくる。しかし、嵐丸は素知らぬ顔をして、モンブランを一口食べる。口の中に何とも言えない甘さが広がっていく。

「昨夜、よばいにあいました。しかも、一人じゃない。同時に複数の人間に。もちろんみんな返り討ちにしてやりましたが」

当然の結果だと、嵐丸は思った。

「会長、あなたの仕業ですね？」

「人聞きの悪いことを。何の証拠があつて」

「証拠ならここにありますが」

慎はぐつたりとなつた雅祐を、嵐丸の前に差し出した。

雅祐のフランス人のような彫りの深い美しい顔には殴られた痕が痛々しく残っていた。

「篠崎センパイがすべてを白状してくれました」

「申し訳ありません、会長」

涙を流しながら、ひたすらに謝る雅祐。

（とりあえず、計算通りか）

嵐丸はあきらめにも似た吐息をもらすと、席からゆっくりと立ち上がる。そして、かるやかな足取りで慎の前に歩み寄る。

「どうして副会長はそうまでして拒もうとする？」

「当然のことじゃないですかっ！」

怒りとテレに顔を紅潮させる慎。

この場ですぐにでも押し倒したい！ という衝動にかられながらも、今はぐつと堪える嵐丸。

「当然？ 男と男が愛し合うのが間違いだと？」

嵐丸は左手で慎のあごを持ち上げ、顔を近付ける。今すぐにでもそのピンク色の唇を貧りたかった。しかし、まだまだここは我慢である。

「それは君の偏見というものだ。好きになった人がたまたま男だっ

たにすぎない。副会長はその純粋な気持ちを偽りだと?」

「そ、それは……」

嵐丸のいかにもの正論に、慎は言葉を詰まらせた。困惑した碧い双眸には、美しい自分の姿が映っていた。

（もうダメだ）

嵐丸はもう自分の欲望を押さえることができなかった。同意など求めている余裕はなかった。

自分の唇が慎の唇に吸い寄せられていく。そんな感覚に溺れていた。

のも束の間だった。

「え?」

視界が急転した。目の前にあった慎の姿は消え、天井のシャンデリアだけが嵐丸の視界にあった。

「えっ?」

嵐丸は自分が床に倒れていることに気付くと、同時に背中に痛みが走った。

目だけで慎の姿を探す。

「今ボクに何しようとしたんですか?」

頬をピクピクさせ、額に怒りマークを何個も浮かびあがらせた慎が、こちらを見下ろしていた。

「何って? こっちが聞きたいぐらいだ」

「身に危険を感じたもので、つい背負い投げを」

「それは心外だな」

ショックだと言わんばかりに、額に手を当てて吐息をもらす嵐丸。そのなやめかしい仕草を見ていた雅祐は、感嘆の吐息をもらしていた。

（美しさとは罪だな）

「寝たままやっても様にならないですよ」

自分の世界に浸っているところを、慎は思い切り突っ込みを入れてくる。

「そう思っのなら起こしてくれてもバチは当たらないと思うがな」
しかし、慎は疑いの眼差しをこちらに向けたまま近付いてこようとはしない。

「と、とにかく。ボクは負けませんから！」

それだけ言って、慎は足早に生徒会室を出ていった。

「会長、大丈夫ですか？」

腫れた顔でこちらにやってくる雅祐。まるで割れ物を取り扱うように、嵐丸をそつとやさしく半身を起こす。

「ああ、これぐらいどうということはない。ここの絨毯は特注だからな」

「しかし、会長を投げ飛ばすとは……副会長は何て命知らずな」

「このことは決して他言するなよ。俺の親衛隊があいつを殺しかねないからな」

（つても、もう手遅れだろうけどな）

嵐丸を取り巻いていた熱い視線はすでに消えていた。慎への報復に向かったのだろう。

（ま、あいつなら放っておいても大丈夫か）

嵐丸はとりあえず目の前にあるごちそうに手をつけることにする。
「会長はそこまで副会長のことを……」

嵐丸は自分の唇で雅祐の言葉をさえぎった。まるで魂を抜き取られたかのように全身の力を失ったのか、嵐丸の腕に雅祐の体重がかつてくる。

「痛い目に合わせてすまなかつたな」

嵐丸は雅祐の腫れた顔の部分に口付けていく。

「か、会長……」

「いいから、じつとしてろ」

目蓋から頬。そして、唇から首筋へと。

「あ……っ」

雅祐がびくつと体を震わせる。

そこで嵐丸は唇を雅祐の首筋から離れた。くたりと糸の切れたマ

リオネットのように床に倒れ伏す雅祐。

「いつまで見ているつもりだ？ さっさと出てこい」

嵐丸は立ち上がった。

「いいじゃんか、見せてくれたって」

「俺は自分のHは他人には見せるつもりはないんだよ」

「キスは平気でやるくせにさ」

背後に人の気配を感じて、嵐丸は振り返った。

そこには両腕を頭の後ろに組んで、にやにやとした顔で立ち尽くす少年が一人。

何の手入れもしていない伸びきったボサボサの黒髪からは、まだ幼さを残した大きな瞳が覗いていた。

猿鳶悟衛門。悟衛門は猿鳶流忍者の末裔であり、爽風家当主を守るのが役目だった。まだ十四歳ながらも、悟衛門はすでに統領の地位にあった。

「悟衛門、仕事だ」

「仕事あ？」

悟衛門は思い切り嫌そうな顔をする。

「ずいぶん不服そうだな」

「だって、ロクな相手いないんだもん。たまにはおいらだって心を熱くするような奴を相手にしたいんだい」

「ほお。相手が徳平慎では不満だと言うんだな。そうかそうか。なら、他の奴に頼むとするか」

ペラペラと不平不満を宣う悟衛門に、きびすを返して白々しく呟く嵐丸。

「とくだいら……しん？」

悟衛門が眼前に顔を押しつけてくる。その瞳は欲望という名の感情に爛々と輝いていた。

「とくだいらしん、って……さっき嵐丸を投げ飛ばした徳平慎か？ 油断してたとは言っても、嵐丸を投げ飛ばしたんだから、あいつめちゃくちゃ強いな」

「そういうことだ。気を抜くと痛い目にあうぞ」

「よっしゃあ！ その仕事受けたあ！」

嵐丸の言うこともまともに聞かぬまま、悟衛門は即行ダッシュで、テラスから外へ飛び出していこうとする。

「ちよつと、待て！」

嵐丸は予め悟衛門の首に掛けておいた手綱を引っ張った。首を絞められ、顔を青くした悟衛門が足元に転がる。

「念押ししとくがな、あいつのヴァージンは俺のモノだからな」

ぐつぐつと手綱を引いて念押しする。悟衛門はジタバタと苦しみ悶えているが、この際はそんなことどうでもいい。

「それと、今のあいつは敵が多いからな。ちゃんと見張ってるよ」

「あの、会長。差し出がましいようですが、彼白目向いて泡吹いてますけど」

「気にするな。この程度でこいつは死なん」

嵐丸は手綱を持ったままぐるぐると回転し、遠心力を使って悟衛門をテラスから外へ放り投げた。

きらーん。

遠くの空で、悟衛門が星になる。

「さて、続き続き」

嵐丸はニタリと笑うと、窓を閉めた。すっかり味をしめてしまった嵐丸は、お医者さんごっこをマイブームに加えるのだった。

第3話

生徒会室を出て中庭にさしかかる頃、慎はおびただしい殺気を感じていた。

（ムリもないか）

慎は胸中で毒づいた。とっさのこととはいえ、あの生徒会長を投げ飛ばしてしまったのだから、それなりの報復があっても不思議はなかった。

（まったく、会長も少しは場所を選んでほしいよ。何も篠崎センパイのいる前で……）

せっかくのチャンスだったというのに、慎は恥ずかしさのあまり嵐丸を拒んでしまった。

（あー、ボクのバカバカバカあーっ！）

慎は後悔の念にさいなまれる。
と。

「っ?」

上空から殺気とはちがう、まがまがしい気を感じた。
空を仰いでみると、何かがこちらに急降下してきている。

「慎ちゅわぁくん」

それは人間らしかった。唇を尖らせて、下心見え見えのすけべそうな顔で落ちてくる。

ずこっ！

目測を誤ったのか、それは上半身を物の見事に地面にめりこませた。突き刺さっているというべきなのだろうか。

さすがの慎も言葉を失い、呆然とそれ……どうやら少年のようだ……を見つめていた。

「うーうー」

呻く声にハツと我に戻った慎は、あわてて少年の体を引っ張った。ポンっ！ という軽い音とともに少年の上半身は地面から抜けた。「ひょえー、おったまげたあ」

泥だらけの顔で、少年はけろっと言う。普通の人間なら死んでいてもおかしくない高さから落下してきたというのに。

「君、大丈夫？」

恐る恐る慎は話し掛けてみる。

「へーきへーき。これぐらいどーってことないじゃん」

がははははっ、と高笑いしながら、髪や顔についた泥をはらい落とす。

ボサボサの髪はどうやら元々らしい。幼い表情はどう見ても高校生のものではない。

「花園の生徒じゃないよね？」

「あつたり前じゃん。おいらまだ十四だぜ」

少年は胸を張ってみせる。しかし、着ているのは花園学園の制服だった。

「もしかして……見学者とか？」

「見学う？」

「ここに入学するつもりならやめておいた方がいいかもしれないよ。まだ未来ある少年を嵐丸の毒牙にかけてしまつてはいけない。この無邪気な少年には自分と同じ思いをさせてはいけない。

慎は心にそうかたく誓う。

「ちがうよ。おいらあんたに会いに来たんだ」

「ボクに？」

「うん。嵐丸の命令だけどさ」

「会長の？」

嵐丸の悪巧みが脳裏をよぎる。

「おいらの名前は猿鳶悟衛門。よろしくな、慎ちゃん」

有無も言わず、悟衛門と名乗った少年は慎をぎゅっと抱きしめた。

「な、何をっ」

慎は悟衛門の首根っこをつかむ。

「するんだあーっ!」

そのまま勢いをつけて投げ飛ばす。

（やばい。つい条件反射で）

はあはあと息を荒げながら、慎はあわてて悟衛門を見た。

「え?」

そこには紺色のブレザーを来た大木が転がっていた。

「変わり身の術っていうんだぜ」

背後からの声に、慎は警戒を解かずに振り向いた。

「っ?」

慎は目を見張った。

距離をおいてにつこりと笑う悟衛門がいたかと思うと、次の瞬間には唇に生暖かくやわらかいものが触れていた。

そして、それが悟衛門の唇であることに気付くのに数秒とかからなかった。

全身から血の気が引いていく。

「初めてのキスはレモン味、ってか?」

悟衛門はからかうようにけらけらと笑うと、バック転を三回ほどして再びこちらとの距離をおいた。

（速いっ）

悟衛門の動きの素早さに圧倒されながらも、慎はショックのあまり硬直してしまい、追いかけることすらできなかった。

（会長以外の奴に唇を奪われた……）

花園に入学して以来ずっと守ってきた唇を、こんなにも簡単に十四歳の少年に奪われてしまうとは。

「慎ちゃんって意外とガードが甘いんだもんなあ。犯してください、って言ってるようなもんじゃん」

また背後から、正確には慎の耳元でハッキリと悟衛門の声が聞こえた。

「くっ」

振り返ると、悟衛門はまた距離をおいて木にもたれかかっていた。
「嵐丸を投げ飛ばしたぐらいだからどれぐらい強いのかすっげー期待してたのにさー」

「会長を？」

「そつ。嵐丸はあー見えても『黄金の右手を持つ男』って、その筋じゃすっげー有名なんだぜ」

「会長ってそんなに強いのか？」

慎には悟衛門の言ってることが信用できなかった。どう見たってただの工口高校生にしか思えない。

「あ、その目は信用してねえな」

人差し指をこちらに向けて、悟衛門。

「ま、普段があれだもんなあ。あいつ、ホレた奴の前だと妙に隙だらけになっちまうんだよ。だから、あいつまだ慎ちゃんに右手で触ったことねえだろう？」

「それは会長が左利きだからじゃ」

「ちやうちやう」

悟衛門は顔の前で右手をひらひらさせて否定する。

「嵐丸の利き手は右。あいつが右手を使う時はマジになった時だけだ」

「ふーん」

（つてことは、ボクはマジじゃないんだ）

右手で触られないということはそういう意味なのだろうか。それとも。

「けど、例外もある。それはマジで好きになった相手が嵐丸の求愛に同意してくれない時、とかね」

まるでこちらの心を読んだかのように、悟衛門はからかうような視線を投げかけてくる。

「あいつはまず最初に相手の同意を確認すっからな」

「どうして君はそんなに会長のことに詳しいんだい？」

慎が質問すると、悟衛門はふーっと長いため息をつく。

「そいつあ、嵐丸がおいらの主人あるじだからさ」

「主人？」

慎は一瞬よからぬ想像をしてしまう。

この少年はもしかして嵐丸に変な調教でもされてしまったのでは。
「あ、今Hな想像しただろ？」

ぎくつ。

凶星を刺され、動揺をあらわにする慎。悟衛門はまたけらけらと小バカにしたように笑う。

「ま、似たようなもんだけどさ。おいらは代々爽風家に仕えてきた猿鳶流の忍者の末裔なんだ」

「忍者？へえ、今でもそういう人っているんだ。どうりで動きが素早いわけだ」

物珍しい物でも見つけたように、慎はマジマジと悟衛門を見つめた。

「そんな目で見んなよ。コーフンしてくるじゃん」

言い終えるよりも早く、悟衛門は慎のズボンを素早く下ろした。
ついでに下着も。

下半身があらわになる。

「いったきまーす」

「なっ」

悟衛門がいきなり下半身に顔を埋めたかと思うと、慎の大事なモノをパクつと啣えた。まるでアイスクャンディーでも啣えるかのよう。
うに。

「あっ……ん」

慎は今までに出したことのないような喘ぎ声を出していた。

そして――

昇天。

しかも、悟衛門の口内で。

「ごくりと喉を鳴らす悟衛門。」

「ごちそうさん」 任務完了、ってか」

舌なめずりしながら、悟衛門がご丁寧にズボンを上げてくれる。
頭の中は真っ白だった。

体はすっかり萎えてしまつて、その場にへたりと座り込む。

（会長に捧げるためにずっと守り続けて体をこんなに最もあつさと奪われてしまうなんて……。ボクはもう会長に会えない！）

「何もそんなに涙ぐまなくなつたていいじゃん。そんなに気持ちよかつたあ？」

こつちの気持ちなどおかまいなしで、悟衛門はにこやかな顔を近付けてくる。

「誰がつ！」

右腕をぶんつと振るが、悟衛門はあつさりとそれをかわす。

「言つたろー、慎ちゃんは隙だらけなんだつてば」

悟衛門の勝ち誇つた笑みに、慎は自分が敗者であることを思い知らされた。同時に自分が天狗になつていたことも。世の中には自分より強い人間はまだたくさんいるということだ。

（まだまだ修業が足りないな）

慎はふらふらと立ち上がる。まだ下半身に力が入らないが、歩けないことはない。

（誰もいなかったのが、唯一の救いだ。こんなとこ他の生徒に見られたら……）

そこで慎は違和感を感じた。

誰もいない？

放課後にこの『愛の花園』と名称されている中庭に誰もいないのは不自然すぎる。

（まさか？）

慎の予感は的中した。

突如、目の前が煙に覆われた。とつさに鼻と口を隠す慎だったが、

すでに手遅れだった。目に激痛が走り、開けてくことができなかった。涙がボロボロとこぼれてくる。

（催涙ガス？）

慎はおぼつかない足取りで煙の外へ出ようとする。

「っ！」

後頭部に強い衝撃を受けた。

慎は遠くなる意識の中で、悟衛門の姿を見た。

第4話

昇天。

雅祐はぐったりと倒れると、遠くを見つめていた。快樂の余韻に浸っているのだろう。

「嵐丸、大変なことになったぞー」

セリフの割りには緊迫感のない声で、悟衛門がテラスから飛び込んでくる。

「ぐえっ」

哀れ雅祐は思いっきり悟衛門の着地点となっていた。

「時と場合を考えて入ってこい、バカ者！」

嵐丸は右拳を容赦なく悟衛門の顔面にめりこませた。

「いーじゃんか、もう終わっちまってんだから」

ぐりぐりとめりこんだ拳を抜きながら文句を言う悟衛門。

「で、何だ？」

「慎ちゃん拉致られた」

けるつとした顔で答える悟衛門。

「思ったより早い展開だな。それで、お前はその時何やってたんだ？」

「見てた。とりあえずは任務は完了したし」

「見てた？」

「うん。ただ見てた。だって嵐丸は慎ちゃんのこと見張ってるとは言っただけど、守れとは言わなかったじゃん」

嵐丸はもう一度悟衛門の顔面に右拳をめりこませた。

「お前にちゃんと言わなかった俺がバカだったよ」

「そう思うんなら、早くこの拳のけてくれない？」

人差し指で嵐丸の右拳を差して、悟衛門。

「居場所ぐらい突き止めてんだろっな？」

嵐丸は右拳を抜こうとはせず、逆にぐいぐいは押し込む。拳と顔の隙間から血が流れている。おそらく鼻血でも出したのだろう。

「もちっ！ だから早くどけてくれよー」

「その前に僕の上からどいて下さーい」

消え入るような声が足元から聞こえてくる。見ると、下腹部に悟衛門を乗つけて顔面蒼白の雅祐がいた。

「あ、悪い悪い」

顔面に拳をめりこませたまま、悟衛門は移動する。

「バカやってるヒマはねえぞ」

嵐丸は右拳を引いた。

「まさか、またアレやんのか？」

鼻血を垂らしながら、うんざりした顔で悟衛門が言う。

「つべこべ言わずにさっさと案内しろ」

嵐丸は悟衛門の尻を蹴り上げた。ぶつくさと文句を言いながら先を行く悟衛門に続いて嵐丸も生徒会室を出ていく。

「お気をつけてえ」

弱々しい雅祐の声が、嵐丸たちを見送った。

「これからどうするおつもりですか？」

後頭部に鈍痛を感じながら目を覚ました慎の耳に一番最初に入ってきたのはそんな言葉だった。

（冷たい）

全身がひんやりと冷たかった。ぼんやりと視界に入ってきたのはバスケットボールのゴール。すぐにここが体育館だとわかる。冷たいと感じたのは、自分が体育館の床に寝転がっているからだ。

そして、次の瞬間には自分が全裸であることに気付く。

（なっ……どうして？）

慎はあわてて飛び起きる。同時に何人かの騒めく声が聞こえた。

「何だ、もう目覚ましちゃったんだ」

聞き覚えのある甲高い声に、慎は振り向いた。その数ざつと五十人はくだらなかった。その中心に立つ一際目立った細身の美少年は確か『爽風嵐丸親衛隊』の隊長のはず。名前は覚えていないが。妙になよなよしたところが慎は嫌いだった。

親衛隊隊長は優雅に足取りでこちらにやってくる。全裸なおかげで慎は縮こまってしまふ。それを優越感に浸って見下ろす親衛隊隊長。負けずと視線だけでは威嚇するのだが、どうも全裸では迫力に欠ける。

「ボクをどうするつもりだ？」

「どうしようかなあ」

なめまわすように慎の裸体を見つめる親衛隊隊長。ぞつとして全身が栗立つ。できることならここにいる全員をたたきのめして、服を剥ぎ取りさつさと逃げだしたい。

「君さあ、嵐丸さまに気に入られてるからってちょっといい気になりすぎてるんだよねえ。僕たち親衛隊のことも考えてもう少し自分の立場をわきまえて行動してほしいんだよ」

「充分にわきまえてるつもりだけど」

慎の言葉が癪に障ったのか、親衛隊隊長はこちらの髪の毛を鷲掴みにすると、怒りに満ちた顔を近付けてくる。

「やっぱりおしおきが必要みたいだね」

髪の毛から手を離すと、指をパチンと鳴らす。

親衛隊の数人――しかも体力に自信のありそうな――がこちらにやってきたかと思うと、慎の両手足をつかもうとする。

「何するんだっ！」

必死に抵抗する慎だったが、全裸であることがネックとなり思った反撃ができない。

（しまった！）

ひとりが慎の右足にしがみついた。そして、続いてもうひとりが

左足に。

「ムダな抵抗はやめておいた方が身のためですよ」

親衛隊隊長がくくつと喉を鳴らして笑う。慎がいたぶられる姿を思い切り楽しんでいるといった様子だった。

両足を封じられた慎はあっけなく両腕も封じられる。白い裸体が

顔が熱く火照っていくのがわかる。恥ずかしさと怒りの感情が入り交じっていた。

「さあ、おしおきの時間だよ」

親衛隊隊長の右手には、どこから持ってきたのかいつの間にかサバイバルナイフが握られていた。その瞳は嫉妬という感情の炎をメラメラと燃やしていた。

「何をする気だ？」

「本当はレイプしようかと思ったんだけど、気が変わったよ。それぐらいのことでは君はこりないだろうからね」

親衛隊隊長はあらわになった慎の大事なモノを握りしめた。

「これさえなければ、お前はもう嵐丸さまに愛されることはない」
力が必要以上にこめられる。しかし、慎は苦痛と恐怖をけつして
顔には出さなかった。出せば、それは自分の敗北を意味していたか
らだ。

（どうしてボクがこんな目にあわなきゃならないんだ。すべては會長のせいだ！ くそー、死んだら絶対に化けて出てやるうーっ！）

最大の危機を目の前にして、慎が考えたのはそんなことだった。

[illegible]

突然、何の前触れもなくその爽やかな笑い声は体育館に木霊した。

第5話

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、愛しい人が呼ぶ！ 愛がほしいと俺を呼ぶっ！」

体育館にいた全員がこちらに注目した。

（見てる見てる）

赤いマスクで顔を隠し、口には真つ赤な一輪のバラを啣えた。その正体が嵐丸であることはきつと誰も気付いていないだろう。

嵐丸は今まさに興奮の頂点へと登りつめようとしていた。

「な、何者っ？」

待っていたお約束の掛け声。

「人呼んで『赤いマスクの美少年』見参っ！」

赤いマントをばさあとひるがえし、啣えていたバラをふわりと投げる。

「ダサダサなネーミング。見たまんまじゃなか」

背後で悟衛門が小声で呟くのを、嵐丸は聞き逃さなかった。

「ヒーローは赤と昔から決まってるんだ」

今も昔もヒーローごっこは嵐丸のマイブームだった。

「つきあわされる身にもなってくれよなあ。けっこう恥ずかしいんだぜ」

悟衛門がそう言った瞬間、嵐丸は回し蹴りを喰らわせる。悟衛門は見事に壁にその頭をめりこませていた。

（愚か者め）

嵐丸は嘆息すると、再び向き直る。

「天下の『爽風嵐丸親衛隊』がよってたかって副会長いじめとは感心せんな」

とおつ、とジャンプし、くるりと一回転して慎の前に着地する。

「え、えらそうな口を……」

親衛隊隊長は臆した様子もなく、キツと目を吊り上げる。やはりこちらの正体には気付いていないようである。心なしかセリフが棒読みのような気もするが、ここはあえて気にしないことにする。

「みんな、徳平をやる前にこつちを先になんとかしなさいっ！」

親衛隊隊長の号令一下で、慎を取り押さえている者以外の全員が嵐丸に襲いかかってくる。

心なしかその表情はともうれしそうに見えるが、ここでもあえて気にしないことにする。

「ふっ、ムダなことを」

嵐丸はほくそ笑むと、瞬時に行動に移った。

「ひっさあーっつ、コールドフィンガッ！」

右手が黄金色のオーラに包まれる。

襲いかかってくる親衛隊隊員たちの間を華麗にすり抜けていく。

直後、全員が惚けたようにその場に倒れ伏す。

それはまさに数秒の出来事だった。

説明しよう！

嵐丸はすれ違いざま、右手でズボンをずらし、大事なモノを握ると上下に擦る。あっという間に、昇天。次から次へと親衛隊隊員を快楽の園へ導いていったのである。

残るは、慎を取り押さえている数人と親衛隊隊長のみ。

「よ、よくも」

親衛隊隊長は右手に持っていたサバイバルナイフを投げ捨て、顔を紅潮させて突進してくる。心なしか唇を尖らせているような気もするが、ここでもしつこいようだがあえて気にしないことにする。

嵐丸はその場から動くことなく、先程と同じ手口で親衛隊隊長をあっさりと昇天させた。

慎を取り押さえていた親衛隊隊員はすっかり悟衛門に横取りされてしまっていた。

「こっちさーん おいらも早く百人抜きやってみてえー」

「一億光年早いんだよー！」

獲物を横取りされてご機嫌ななめな嵐丸は、満足気な笑みを浮かべる悟衛門の頭にかかと落としを喰らわせる。

「ごきつ、という鈍い音がかかとに響いた。」

「あ、あの……」

慎はあ然とした表情でこちらを見上げていた。その白く美しい裸体がいつになく嵐丸を激しく刺激する。

嵐丸は悟衛門の頭から足を下ろした。

「大丈夫だったか？」

嵐丸は自分のマントを外すと、慎の美しい裸体を包み込んだ。きつと慎は恐怖から解放され安堵の涙を流しながらこの胸に顔を埋めることだろう。

（ああ、なんてドラマチックなんだあ）

自分の世界に陶醉する嵐丸。
が。

「……会長、なんて格好してるんですか？ またそれも生徒会の予算使って購入したんじゃないでしょうね？」

嵐丸の期待は虚しく、慎は冷たい眼差しをこちらに向けて、マスクを剥ぎ取る。

「どうして俺だつてわかった？」

「わからない方が不思議です！ みんなだつてホントはわかってたのに、会長に氣遣つてあえて氣付かないフリしてくれたんです」「絶対バレないと思つてたのに……」

嵐丸はシヨツクのあまり慎に背を向けて、いじけて座り込み床にの字を書く。

「だからあ、おいらが言つたじゃん。いっそのこと着ぐるみにしまえ、つて」

「そうしたら、俺の美しい顔が隠れてしまうだろう」

嵐丸は慎からマスクを取り返すと、再び装着し華麗にポーズなどを決めてみせる。

「あなたは『反省』という言葉を知らないんですか？」

振り向くと、慎が頭を抱えていた。

「こんな事態を招いてしまったのは誰のせいだと思ってるんですか？」

嵐丸は迷うことなく慎を指差した。意外だといわんばかりの表情を見せる慎。

「お前が俺の求愛を拒むからだ。俺は相手の同意がないと手はつけない主義なんだ！」

「じゃあ、さっきのは相手の同意のもとに行なわれたんですか？」
半眼でこちらを見据える慎。

「もちろんだっ！」

嵐丸はきっぱりと答えた。自分の親衛隊隊員である以上は、いつでもOKということなのだ。

「……………」

慎は言葉を失っていた。

「おいらは相手の同意なんか関係ないもん」

横から悟衛門が割り込み、慎の唇を奪おうとする。

「二度もさせるかっ！」

嵐丸はすばやく右腕を振りかぶって悟衛門にラリアートを喰らわせる、そのまま勢いをつけて吹き飛ばした。悟衛門はバスケットボールのゴールにはまって目を回していた。

「ボクは彼に触れることすらできなかったのに」

慎は信じられないといった顔で、嵐丸を凝視していた。

「彼の言ったことはまんざらウソでもなかったんだ」

「悟衛門の奴、何か言ったのか？」

「会長のこと『黄金の右手を持つ男』だっ」

慎の目が心なしに尊敬してくれているような気がした。しかし、慎はその意味を少し勘違いしているような気もしないではないが。

（今なら落とせるか）

この最大のチャンスを逃してはならない。

「何だったら、今ここでそれを試してみてもいいんだが」

嵐丸は左手で慎の顔を上に向けさせ、右手を下半身へと伸ばしていく。右手が黄金色のオーラを発し始める。

嵐丸の唇が慎のピンク色の唇に触れようとしたその瞬間。

「ダメです!」

慎は弾けるように嵐丸の腕の中から逃げ出す。

「どうして?」

「ボクはもう汚れてしまったから」

「汚れた?」

「ボクは悟衛門くん……」

慎はゴールで目を回している悟衛門を見た。慎は悟衛門に昇天させられたことを言っているのだろ。しかし、それをさせたのは嵐丸本人である。知らないはずがなかった。

まさに事は嵐丸の計画通りに進んでいた。

「心外だな。俺はそんなに心のせまい男じゃないぜ」

嵐丸は大げさに両手を広げる。

「会長!」

慎は瞳をうるませて嵐丸の胸に飛び込んでくる。嵐丸はやさしく慎を包み込む。

これはもう同意したも同然といえよう。

嵐丸は慎の唇を激しく貪った。慎も舌を絡めてくる。

（やっとやっと慎が俺のことをーっ!）

嵐丸の感激はそのまま自分の下半身へと伝わっていく。

メラメラと愛のパワーがみなぎっていく。慎の気が変わらないうちにこのまま一気にフェードインするしかない。

嵐丸は慎の大事なモノを弄びながら、口付けを首筋から胸へと。

「あ……んっ」

初めて聞く慎の喘ぎ声に、嵐丸はますます気持ちが高ぶっていくのを感じていた。

（じらしちゃおっかなあ）

などと、いたずら心もかきたてられる。

「あの日……会長に初めてキスされた……時から……あつ……ん……ボクはホントはずっと……会長のこと……はあ……好きだった……たん……」

喘ぎながらも、慎は懸命に何かを伝えようとしていた。

「あの日？ 初めてキスした？」

思わずオウム返しに聞き返してしまう。

「今のが初めてだろう？」

嵐丸にはまったく記憶がなかった。慎に会ったのは入学式が初めてではなかったのか。

愛撫を中断して、嵐丸は考え込む。

思い出せない嵐丸に、慎の顔はだんだん険しくなっていく。さっきまで熱いムードはもう微塵も感じられなかった。

「まさか、憶えてないんですか？ ボクが花園に受験に来た時のこと？」

「あ、いや。そんなことは」

などと、とぼけてみせながら、嵐丸は必死に思い出そうとする。が。

「ボクがバカでした」

慎は下半身に置いてあつた嵐丸の右手を払いのける。

「考えてみれば、会長みたいなちゃんぽらん人間がたかが一度キスしたぐらいの人間のことをいつまでも憶えているはずがなかったんだ」

「お、憶えてるって」

慎のどこかトゲのある口調に、嵐丸はあわててとりつくろおうとでまかせを言う。やはり見え見えだったのか、慎はまったく信用してないといった感じだ。

「助けてくれたことには一応感謝しておきますが、二度とこんなことにならないように親衛隊の管理をしっかりと願います。それと、ボクの提案のことも！」

むすっとした顔で慎は立ち上がると、スタスタと歩いていく。

「待てよ、待てつたら」

後ろから慎の右腕をつかみ、引き止める。

「ボクに触らないでくださいっ！」

慎に左手を取られると、例によって例のごとく今度は巴投げを喰らって吹き飛ばされる嵐丸。体育館の窓を格子ごと破壊し、空の彼方へと飛んでいく。

「ここまできてそりゃあねえだろーっ！」

嵐丸の雄叫びがいつまでもいつまでも秋の夕空に響き渡った。

哀れ、嵐丸。

慎と結ばれる日がくるのはいつの日のことか。

おしまい

第5話（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
一言でも感想をいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5317e/>

黄金の右手を持つ男

2010年10月8日15時49分発行